

野鳥たより

—北海道—

第49号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和57年9月21日



コモンシギ 鶴川 1982. 9. 梅木賢俊



も く じ

探鳥地案内 (西岡水源池)	2
緑と野鳥 (2)	藤巻裕蔵 … 3
校庭の鳥をみながら	高橋明雄 … 4
野幌交流探鳥会報告	5
探鳥会報告	野幌、植苗、福移 … 6
探鳥会案内	8
鳥民だより	8
編集後記	8

西岡水源池

探鳥地案内

◆位置 札幌市豊平区西岡5条14丁目

◆交通 地下鉄南北線澄川駅から市営バス(環80)で西岡水源池下車。

◆概況 札幌市の南東、月寒川の上流に明治42年に造られた上水用のダムである。現在は使われておらず、池を中心とした公園になっている。水面標高135m。池への流れ込みから上流は湿原状となり、木道が渡されている。

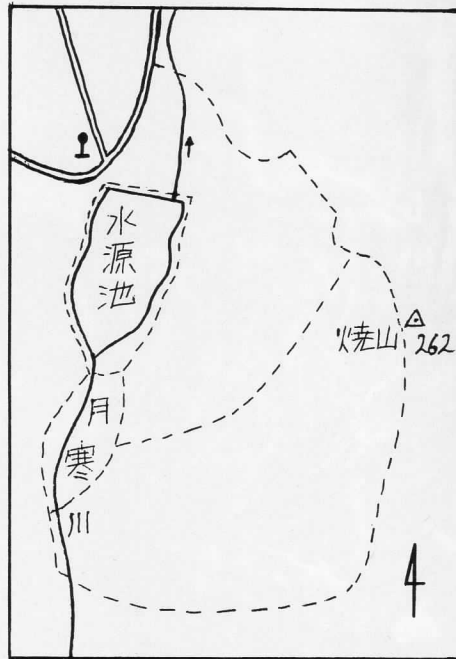
◆コース 池の周辺を廻るだけでも5月には、アカハラ、イソシギ、オオジギ、キセキレイ、カワセミ等を見ることができる。また、めぐらされた木道を往くと、ヨシ原の中からはクイナ、そして周辺の林からは、オオルリ、キビタキ、クロツグミの音が降り注ぎ、水の流れを中心に割合に豊かな鳥相をみせてくれる。さらに焼山(262m)へ続く道をとると、コルリ、エゾライチョウ、アオバト、ツツドリなど山林の鳥達がむかえてくれるであろう。

◆特記 5月初めの渡りの時期には、とくに焼山へむかう道にルリビタキ、ベニマシコの個体が大変に多く、時にクロジの姿も見る。6月から8月にかけて、池の上で練りひろげられるハリオアマツバメの群飛は一種の見ものである。フクロウも4月~6月に数回観察され、毎春雪溶けと共に林道の上にペリットが発見されている。56年11月にはヤマセミが観察され、57年4月30日~5月4日の間、池に1羽のハイロガンが滞在した。

◆その他 以上に記したものを含めて、この4年程の

粗い観察で(秋~冬は殆んどなし)80数種がかぞえられており、都市近郊の探鳥地としては楽しめる所だと思う。冬はクロスカントリースキーのコースとなっており、探鳥しつつのスキーはいかがか。公園化により、訪れる人が増えている現在、こ

こに住む鳥達への圧迫を少しでも少なくするための積極的な努力が、公園管理者に求められるところだ。



062 札幌市豊平区西岡1条6丁目 山田 三夫

緑と野鳥 (2)

藤巻裕蔵

緑が多くなると、そこに生息できる野鳥が多くなるといことを、帯広市での調査結果を一つの例として紹介した(本誌、第48号)。緑ならばどのようなものでもよいのかというと、野鳥のためには草地だけのときよりも林が加わった方がよいのである。緑と野鳥の関係をみると、緑の量はもちろんであるが、その質も大変重要である。そのことについて、今回は3つのタイプの林を比較して検討してみる。

◆天然林と人工林

北海道で一般にみられる天然林は、エゾマツやトドマツなどの常緑針葉樹と、イタヤカエデ、シナなどのいろいろな落葉広葉樹が混った針広混交林である。天然林の一部は伐採され、カラマツやトドマツが植栽された人工林に変えられている。現在、北海道では森林の23%が人工林であるという。天然林も人工林も空から見れば緑が100%である。しかし野鳥のすみ場所としてみたときには、この2つにはどのようなちがいがあるのだろうか、旭川市東旭川町瑞穂にある天然林と人工林の鳥類を比較した結果を紹介しよう。

天然林は針広混交林で、高木も低木もあり、林床植物はクマイザサやシダ類などが多い。また幹の太い樹も多く、巣に適した樹洞も多い。人工林には樹木の高さによっていろいろあるが、比較に用いたのは幼齡林と壮齡林である。幼齡林では高さ3mくらいのトドマツとササなどの丈の低い植物があるだけで、高木はない。遠くから見るとササ原のようである。壮齡林では高木はあるが、同じ高さの高木だけで、樹冠部はうっ閉している。そのため小さな木や林床植物はないか、あっても非常に少ない。この3つのタイプの林のプロファイルを模式図にすると図1のようになる。

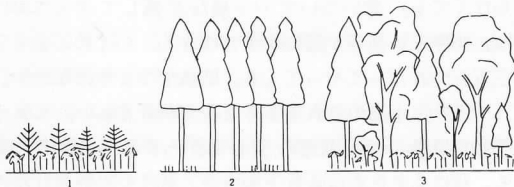


図1 左から1.幼齡人工林、2.壮齡人工林、3.天然林のプロファイル模式図

◆天然林の鳥

天然林の鳥は一年を通すと54種であった。北海道では夏鳥が多いので、季節的にみると種類数は5~7月にもっとも多くなる。この天然林では約35種であった。一方冬鳥は非常に少ないので、冬にはほとんど留鳥だけとなるが、どの月でも10種くらいは見られる(図2)。これらの留鳥はほぼ一年中天然林で見られ、種類構成は安定している。ではどのような鳥が生息しているのか。繁殖期の主要な鳥をあげると、アカゲラ、コゲラ、ミソサザイ、コルリ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、ヒガラ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、ウソであった。

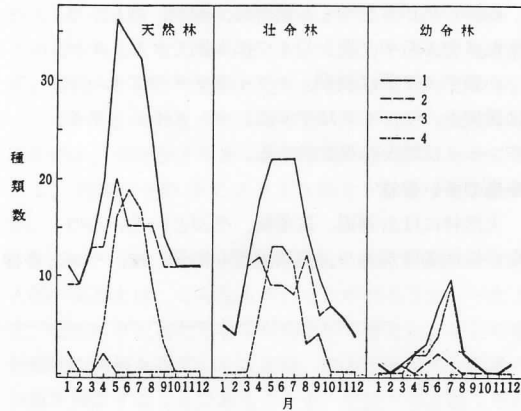


図2 天然林、壮齡人工林、幼齡人工林の鳥の種類数の季節変化。1:全種類数、2:留鳥、3:夏鳥、4:冬鳥と旅鳥

◆人工林の鳥

人工林の鳥は壮齡林では全体でも39種と天然林に比べて少なく、幼齡林では13種とさらに少なくなる。季節的にみると、壮齡林では夏に22種、冬には5種くらいである。冬の留鳥は月によって見られる種が異なり、種類構成も不安定である。幼齡林では夏に13種で、一年間を通しての総種数と同じである。冬になるとササは雪の下となり、丈の低いトドマツが雪の上におずかに出ているだけで、鳥がまったく生息していないからである。

繁殖期の主要な鳥も、天然林より少なく、アカゲラ、コゲラ、シジュウカラ、ゴジュウカラなどの樹

洞営巣性の鳥、ミソサザイやコルリのように地上に巣をつくる鳥、ウグイスのようにやぶに営巣する鳥は非常に少なく、主要種ではなくなる。幼齢林の主要種はウグイス、ホオジロ、アオジのわずか3種である。

◆採餌場所と営巣場所

私たちの生活に「衣食住」を欠くことはできない。しかし自前の「衣」を身につけている鳥にとって必要なのは「食住」である。「食」は採餌場所、「住」は営巣場所である。

翼のある鳥は自由に飛びまわられる動物の代表のように考えられている。しかしそれほど自由ではない。イリオン・セガールの「人間の歴史」には次のような文がある。「どの鳥にも、世界のなかに、それぞれのみきたる住みかがある。森に住むのもあるし、野原に住むのもあり、また海岸に住むのもある」。また同じ森林の中でも、種によって採餌場所や営巣場所が大体決っている。クイタダキやヒガラは主に針葉樹で、シジュウカラは広葉樹で、アカゲラは樹幹で、アカハラは地上でといったぐあいである(図3)。

森林の鳥が巣をつくる場所は、樹洞、枝上、草またはやぶの中、地上の4つに大別できる。キツツキ類やカラ類は樹洞、クイタダキやアカハラは樹枝上、ウグイスはやぶに、センダイムシクイやコルリは地上に巣をつくる。

◆鳥の多い森林

天然林には針葉樹、広葉樹、やぶといろいろの鳥の採餌場所があり、営巣場所も樹洞、枝、やぶと多様

である。それに対し壮齢人工林では針葉樹だけで、林床植物が少ないため、樹洞営巣性の鳥ややぶを好む鳥が少なくなる。幼齢人工林にいたっては、森林性の鳥はほとんどすめなくなり、やぶの中で食物をさがしたり、巣をつくるような鳥の生活条件しかない。このように、天然林は人工林に比べると、より多くの鳥が生活できる多様な条件をそなえているわけである。

森林の機能には、木材を生産する以外にもいろいろある。その一つが野生動物のすみ場所としての役割である。森林の取扱いには、森林のもついろいろの機能を十分に発揮できるように注意が必要である。

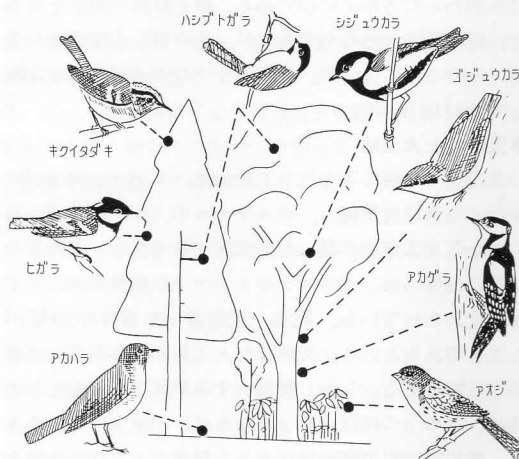
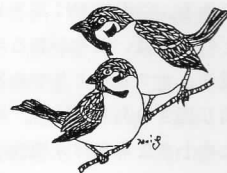


図3 森林の鳥のおもな採餌場所

〒080 帯広市稲田町西2線13

校庭の鳥をみながら

高橋明雄



中間試験が始まった5月21日、机間をめぐりながら窓外へ目をやると、2羽のムクドリが校庭の芝生で餌を啄んでいた。そこへスズメも1羽とんできて、随分仲良く首を寄せあいながら、何やら餌を拾っている。

何を食べているのだろう、と気になった。以前に勤務していた増毛高校の校庭では、カララヒワがタンポポの種子を食べにきていたものだが、ここ岩内高校のタンポポは開花中だし、ミミズを探せるような土の耕起もみられない。公務補さんがきれいに刈込んだばかりである。

ちょっと考えて、間もなく真相らしきものが推察できた。きっと、心やさしい生徒たちが窓からパン屑などを

なげてやっているのではあるまいか。ことさら、愛鳥週間に設置する餌台や巣箱だけが立派なのではない。きばらなくても、思いついてパン屑など落してやっておけば、めざとい彼等が見のがす筈はなく、かくのごとく三五五つれだつてやってくる。結構なことではないか。

やはり、小鳥の訪れるような校庭が好ましい。これぞ平和な風景、情操教育の実もあがろうというものである。現にムクたちは4月下旬まで、近くの岩内神社境内の森に群れて、日暮れになると騒々しく舞上っていた。今は分散して巣作りに入り、やがてふ化育雛が始まるのにちがいない。人間と野鳥たちの楽しい交渉、いい

学校へきたなあ……と思った。

2日め、見ていると今度はムクたちの他にハシブトガラスの夫婦も現われ、少し大きめの餌を口にしたまま、尻をふって歩いていく。ながめているうちに、ふと気になってきたのである。

あの餌の大きさはどうだ、ひょっとすると生徒たちが小鳥をよぶために好意でパン屑を与えているのではなく、だらしく自分の食べ残しを無造作に窓からポイと捨てているのではあるまいか。カラスが掃除にきて、そのおぼれをムクとスズメがわけて食べる、それだけのことなのではないかという疑問であった。

実際の話、彼等が人間の近くへ寄ってくるのは、我々を慕ってというよりも、切実に餌が欲しいから危険をかえりみずやってくる……というだけのことなのだろう。自分本位の偽善的陶醉よりも、はるかに現実的合理的なのが自然界の営みというものだ。

そもそも、芝生に鳥の餌がやたらに落ちてるのがおかしい、生徒の行儀が悪いのだ。教室に備えつけたゴミ箱をなんと心得ているのか、けしからん、さっそく週番から注意の方がいいかもしれない。あやしいぞ、パン屑なんてもんじゃなく、休み時間にお菓子を食べたり、女の子はチョコをほうばったりしているんじゃないか……。

教師というのは悲しい職業である。そんな連想しかできない。本校では、晴れた日の昼休みに中庭だけは解放するが、あとは絶対に舎外へ出さない。怠学による中抜け防止、喫煙防止の含みがあることである。どこか符節が一致してきたような感じで、前日のおだやかな気分が急激に揺らいでいったのは当然であった。

3日めになった。やはりムクが初めに姿をみせ、窓の下までやってくる。やっぱりそうか、集まってくるのは昔から人間の周辺にいてオコボレを頂戴してきた連中ばかりだ。最近は大田舎町のゴミ収集作業も随分徹底してきたし、漁業の町岩内といっても港や加工場に雑魚や内臓

がおちてるわけでもない。カラスたちも困って、こまかくしこしこと稼ぐしかないのだろう。そんな想念にとらわれているとき、ふと、樹木の幹にとび移ってきた鳥がいる。

「おお、お前は赤フンドシじゃないか、腰の赤いエゾアカゲラが、てれくさそうに幹をまわってかくれようとしていた。

キツツキの仲間だからパン屑と関係ないが、他の鳥がきているので安心し、岩内山から倉島牧場の丘陵を越えてとんできたのだろう。つまり、掃除屋さんたちが山の鳥を人家の近くへ誘導してくれるのだ。そのようにみていけば、せっかちな結論は出せないのかもしれない。無用の用という言葉もある。

生徒たちにしたところで、青空の下、芝生にねころがって語りあい、薫風に頬なぶらせてチョコなんぞをほうばるのも、青春の1コマなのではないだろうか。そのおぼれに小鳥があずかり、カラスが代表してアカアアとご挨拶したところで、めくじらをたてることはあるまい。

かつて「沈黙の春」という言葉を呈して警鐘を鳴らした人もいたが、今自分の身边をみわたしてモンシロチョウの姿をみることも稀になった。1,000人を越える生徒が、昼休みに廊下で茫然と立ったまま埃を吸っている。

いつから、このように天地の営みが不自然な回転を始めたのか。学校をとりまく教育環境が全体的にせせこましく、約束ごとの中でどうどうめぐりをやりだしたのか。

かつて、われわれの祖先が満幅の信頼を置いてきた人間の英知とは、こんなものだったのだろうか……などと、窓辺にきた鳥たちをながめながら考えた。身近な動物植物の消長をみていくことは、ひるがえってわが身の位置を検証することであることを、生徒たちと語りあわなければならぬと思った。

(岩内高校 教諭)

〒045 岩内郡岩内町宮園243-6

野幌交流探鳥会報告

柳 沢 信 雄

去る6月12・13の両日、野幌探鳥グループの呼びかけで交流探鳥会が行われました。

参加者は遠く旭川からの30余名をはじめ、岩見沢、江別、小樽、早来町、門別町など道内各地からおおいだき、札幌勢を含めて60余名の多数となりました。

酪農大OB、寺屋圭一氏のご配慮で野幌森林公園に近い、酪農大北光寮を利用することができ、夜の交流会や早朝探鳥会の計画がらくに立てることができました。

又、交流会に先だつての学習会では、野幌森林公園の野村梧郎氏に「石狩平野のど真中に広大な平地林が残されてきた歴史」について講演をいただくことができ、更に多数の貴重な資料を参加者全員に配布いただき厚くお礼申し上げます。

「やじさんのプロミナーかついで」でおなじみの日本鳥類保護連盟、国松俊英氏の参加があり、交流会は一段と盛りあがりをみました。

早朝探鳥会は、4コースに別れて出発しましたが、あいにくの悪天候で、どのコースも満足な成果をあげられず残念でした。特に旭川勢がこれだけとは楽しみにしていたアカショウビンは、姿も声もなかったと聞き申し訳ない思いがしました。

この日8時半からの定例「野幌森林公園を歩きましょう」では、ゆっくり姿を見せたというのですから、よっぽど人見知りをする気の弱いヤツなのかもしれません。



野 幌 57. 5. 9 板垣美津子

4月位から付近の円山公園で、北尾さん御夫妻の足手まといになりながら週に1、2度の割で鳥を見始めました。はじめはまず双眼鏡の扱いから

……なかなか思う場所へ目を持っていくことが出来ず、「ホラ、そこにアオジ……」と言われてもアオジのあの姿も見ることが出来ないまま、鳴き声だけが遠ざかっていってしまう、そんな繰り返しでした。それでもやっと目も馴れ、鳥たちのさえずりや1つ1つ行動のかわいらしさに興味を覚え、今回、初めて探鳥会に参加させていただきました。

大麻の駅を出て間もなく会長さんのお話があり、「野鳥愛護」そのことばを今まで以上に心にとめて、いざ野幌原生林へ。道ばたでウグイスに迎えられ、どことなく今日はステキな鳥に会えそうと思いながら目が四方八方へ……いましました。アカゲラ、ニュウナイスズメ、ゴジュウカラ……円山の木々よりもずっと丈が高いため、見上げてばかりいと首が痛くてたまりませんでしたが、そんな痛みもキビタキ、オオルリとの初対面でどこかへ飛んでいってしまいました。キビタキの胸のなんとも言えないヤマブキ色からオレンジ色へと移るあざやかな色、オオルリの背の深みのあるブルー、自然の中で強く生きているものの素晴らしさ、美しさみたいなものを強く感じました。また、歩きながら様々な鳥達の鳴き声、さえずりを耳にして、会の方達の説明をいろいろと聞いているのもとてもたのしいひとときでした。

いままでは、さほど興味もなくながめていたスズメや

とにかく満足な準備も出来ず、ご不便をかけ不愉快な思いをさせましたが、参加者全員が好意的に受けとめて下さり、暖かい交流の中に終了できましたことを世話人一同にかわって感謝申し上げます。

このような会が来年度は、北海道野鳥愛護会の行事として実行できたらと思います。

カラスの行動ひとつまで、立ち止まって見ている自分をおかしく思う時もあります。これからは、あまりあせらず、じっくりと腰をすえて自分なりの野鳥愛護の気持ちをもって鳥と接していきたいと思っています。

〔記録された鳥〕アオサギ オンドリ トビ ハイタカ キジバト ツツドリ ヤマゲラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ ヒバリ ハクセキレイ ビンズイ ヒヨドリ クロツグミ ヤブサメ ウグイス センダイムシキイ キビタキ オオルリ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ メジロ ホオジロ アオジ カワラヒワ マヒワ イカル シメ ニュウナイスズメ スズメ コムクドリ ムクドリ カケス ハシボソガラス ハシブトガラス (40種)

〔参加者〕五十嵐優幸 浪田良三 梅木賢俊 神林幸恵 曾根モト 斎藤 聡 田中新八郎・慎一郎 青木二郎 横山和成 岩泉ゆう子 堀内 清 天童雅俊 横田通典 柳沢信雄・千代子 佐々木国雅 犬飼 弘 渡辺紀久雄 紅林雅文 早瀬広司 石黒甲子夫・三四子 間ヶ敷利正 板垣美津子 長谷川涼子 田中仁子・秋子 小林清勇 高嶋早苗 二上 篤 野口正男 品田延一 大坊幸七 松原 茂・道子 片岡 胖 新宮康生 北尾 諭・久美子・久勝 西 澄子 金島良子 羽田恭子 宮下絹代・愛子 園部恭一 萩 千賀 国島峯夫・弘子 関口健一 田辺 至 岡田智己・千恵子・衣央 沢里英雄・智恵子 谷口登志 須田 一 長岡宏幸・範子・滋雄・ゆりこ (63名)

〔担当幹事〕野口正男 長谷川涼子

〒064 札幌市中央区南5条西23丁目

植 苗 57. 6. 6 福井スエ

好天に恵まれた初夏の植苗で、念願叶っての探鳥会でした。野幌では「あの木に」、「あの枝に」と言われても双眼鏡を合わせているうちに鳥は飛び立つという仕末で

したから、今回は一種類だけでもその姿を確かめたいと思って出かけました。前日から双眼鏡を合わせる練習をしたのは、勿論のことです。

「オオジュリンが入りましたよ」との声に、胸をときめかせて真先にセットされた望遠鏡へ。写真で見た通りの頭と喉元の黒いオオジュリンが、はっきり見えたのです。たとえようのない驚きと喜びでした。ウトナイ湖畔ではシマアオジがヒヨリヒヨと美しく歌い、胸の黄色も鮮やかに焦茶色の頭を左右に向け、くると後向きになりピロードのような背をみせ、まるで一人舞台です。風に揺れるヨシに細い足でつかまり、尾でコントロールしながら、口を精一杯にあけて鳴くコヨシキリは、いたずら坊やの様に可愛くて、いつまでも見ていました。

自然と野鳥を深く愛して、その所在や名前、習性などを教えてくれた幹事さんや会員の方等に、心より感謝すると共に、開発によって、失おうとしているものの大切さを、改めて痛感した一日でした。

〔記録された鳥〕アオサギ マガモ カルガモ コガモ ヨシガモ トビ ツミ オオジシギ キジバト カッコウ ツツドリ ハリオアマツバメ ヒバリ ショウドウツバメ イワツバメ ハクセキレイ ヒヨドリ ノビタ

福 移

うれしくて、ドキドキしました。

ノゴマと聞いた時、すぐに飛んで行ってしまおうのではなにかと、かなりあせって、「ドコノドコ！」と、大きな声を出したようで、気ばかり急いで、双眼鏡の焦点もなかなか合わないのです。漸くの事です。細い柳の枝先にしがみついて、さえぎっていました。嘘みたくに鮮やかに赤い、真ん丸い（一私には、そう見えました）喉がちゃんとあります。帽子が飛ばされそうな強い風の中で、平気な顔をして大きく体を揺らしていました。私の10倍の双眼鏡でも結構見えるのですが、遠くになると、20倍の望遠鏡には、かないません。毛並みやら、嘴のつやまではっきり見えます。「入ってるから、見なさい。」の声に、何度もちゃっかりのぞかせてもらいました。先月のウトナイ湖での探鳥会では、初めて見る鳥が5種もありましたが、その中にノゴマは入っていませんでした。もともと、野の花を撮るのが好きで、この日も重い思いをして、カメラや三脚を持って行ったのですが、風で動いて一枚も写せませんでした。しかし、全部帳消しです。

小柄なコヨシキリは、ずーっとどこへも行かずに、大きく口を開けばなしてました。か細い足で、よく吹き飛ばされないものです。

イソギも初めてでしたが、チョコチョコ歩いては立ち止まり、じーっとこちらを見てはまた歩いて、ひと飛びしてはと、ずいぶんサービスです。

対岸のコチドリは、遠い上に、地面と混ざり合って、それとわかるまでなかなかでした。

キ シマセンニュー マキノセンニュー コヨシキリ センダイムシクイ エナガ シジュウカラ ホオジロ ホオアカ シマアオジ アオジ オオジュリン カワラヒワ ニュウナイスズメ スズメ ハシボソガラス (コブハクチョウ) (34種)

〔参加者〕平邑恵美 岩泉ゆう子 石岡宗子 樋口歌子 新宮康生 平井さち子 小堀煌治 道川 弘・富美子 横田通典・円 羽田恭子 野村梧郎 天童雅俊 飯山五玖子 関口健一・洋子・誠・晃 紅林雅文 長谷川涼子 品田延一 園部恭一・静江 北尾 諭・久美子 新田順子 岩垂 悟 相馬和子 間ヶ敷利正 犬飼 弘 堀内 清 福井スエ 浪田良三 青木二郎 柳沢信雄・千代子 沢里英雄 梅木賢俊 早瀬広司 高嶋昭英・則子 武田 怜子 伊藤兼夫・スミ子 石 好八郎 清田吉晴 大坊 幸七 (48名)

〔担当幹事〕梅木賢俊 紅林雅文

☎061-01 札幌市白石区もみじ台南7丁目1-8

57. 7. 4

道川 富美子

私には、何か鳴いたな（というよりも、何か聞こえたな）としか思えないような声だったり、目の前を、ちらっと何か通り過ぎたなといった程度の姿だけで、あれは〇〇〇だと教わり、唯々感心するばかりでした。ベテランの方達といっしょでの難点は、と言えば、一生懸命自分で見付けよう、鳴声を覚えようという気がなくなって、捜してくださるのを待っているという風になりそうな事だと思うのは、贅沢でしょうか。

もう、次の探鳥会が楽しみです。

〔記録された鳥〕アオサギ トビ チゴハヤブサ ウズラ コチドリ イソギ ウミネコ キジバト カッコウ ヒバリ ショウドウツバメ ハクセキレイ モズ ノゴマ ノビタキ エゾセンニュー シマセンニュー マキノセンニュー コヨシキリ オオヨシキリ ホオアカ シマアオジ アオジ オオジュリン カワラヒワ スズメ ムクドリ ハシボソガラス 種不明カモ (29種)

〔参加者〕青木二郎 後藤義民 野口正男 浪田良三 長岡宏幸・ゆりこ・範子・滋雄 道川富美子・弘 沢里英雄 戸津高保・以知子 品田延一 横田通典・円 霜村耕介・耕一 浅沼佳代子 新宮康生 岩泉ゆう子 羽田恭子 萩 千賀 横山和成 古館泰行 新田順子 天童雅俊 清水 幸 平邑恵美 藤井泰雄 柳沢千代子 西村辰夫・千世子 新妻 博 菅原矩子 二上 篤 成田春江 高橋 節 武田怜子 長谷川涼子 谷口一芳・登志 相馬和子 関口健一 (44名)

〔担当幹事〕長谷川涼子 岩泉ゆう子

☎064 札幌市中央区北3西23 くるみ荘



1月までの予定をお知らせします。11月は、ガン、カモ、ハクチョウなどの水鳥。12月は、港に集まるカモメ類やカモ類。1月は、給餌台に集まる鳥たちを見ます。寒い季節です。防寒の用意をお忘れなく。

<ウトナイ湖>

昭和57年11月14日(日) 午前10時 ウトナイ遊園地

<小樽港>

昭和57年12月12日(日) 午前10時 国鉄小樽駅待合室

<藤の沢>

昭和58年1月23日(日) 午前10時 札幌市南区藤の沢白鳥園、定鉄バス定山溪線藤の沢下車、白鳥園まで徒歩20分、室内から見るので雪が降っても行きます。参加費200円。

<野幌森林公園を歩きましょう>

上記の探鳥会のほか、次の探鳥散歩を行います。

11月21日(日) 12月5日(日) 午前8時30分 国鉄大麻駅集合です。いずれの探鳥会も、昼食、筆記用具、観察用具をご持参下さい。ひどい暴風雨、暴風雪でないかぎり行きます。探鳥会についてのお問い合わせは、北尾(011)611-6455へ。



◆探鳥会について

今年度から、参加者はネームプレートをつけています。参加者は鉛筆で、幹事は赤で氏名を書いています。これは参加者の記録に

しますので、フルネームで記入するようお願いいたします。

このネームプレートは、お互に名前がわかるので、好評のようです。赤で記名の幹事に、気軽に声をかけて下さい。

当会発行のテキストを、鳥の説明や鳥あわせの時に利用しています。すでにお持ちの方は、探鳥会当日ご持参下さい。初めて参加の方には、一部100円でおお付けしています。

テキストは月別で、その場所での出現率の高い鳥をあげ、森林の鳥、草原の鳥、水辺の鳥というように、一年間で150種程の鳥をあつかっています。これらの鳥

がわかると、ビギナーは卒業です。

探鳥会の最後には、当会特製のチェックリストで、鳥あわせをしています。用紙は4回記入できますので、同一場所で、1~2か月の内に、あと3回、自分で歩いてみると、鳥との距離は、ぐんと近くなるはずで、せいぜい活用して下さい。

のんびりと緑の中を歩くだけでよい。鳥をふくめた自然に接したい。一種でも多くの鳥をみたい。あこがれのあの鳥をみたい等々、いろいろな見方があると思いますが、それぞれの見方で、気軽に探鳥会にご参加下さい。

◆原稿大募集

今回は、原稿や表紙の写真が、思うように集まらず、発行が遅れたうえ、8ページの野鳥だよりになってしまいました。次号は、ちょうど50号になりますので、記念号として増ページでいきたいと思ひます。

50号記念にふさわしいもの、その他なんでも、気軽に原稿をお寄せ下さい。

訃報 金山哲夫氏

本会の古くからの会員で、道央野鳥の会の会長であった金山哲夫氏が、去る7月14日脳溢血のため御逝去されました。金山氏は長らく千歳市文化財調査委員等を務め

られ、文化財の保護に力を尽くされました。昭和55年、「千歳野鳥の会(現、道央野鳥の会)」を創設し、会長として野鳥保護、自然保護のため先頭に立って活躍されました。謹んで御冥福をお祈りいたします。

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

今回は、8ページの野鳥だよりになってしまいました。お詫びすると共に、編集部一同反省しております。これをばん回すべく、次回の50号は、増ページで記念号として発行する予定です。そのためにも、寄稿をお待ちしています。年4回ずつ発行で、50号出すに

は12年余り。この間ずっと道内の野鳥情報を載せてきたわけで、やはり道内のバードウォッチャーには、貴重なものだなあと、改めて感じています。

話は変わりますが、今年の秋は、シギチの数が少ないようでした。これからは、カモ・ハクチョウのシーズンです。彼らは、たくさん来てくれるかしらと心配しています。(渡辺記)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287
☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465